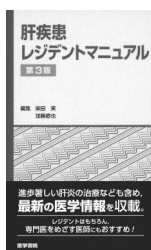


書評

[評者]

上野文昭

米国内科学会(ACP)日本支部・支部長



肝疾患レジデントマニュアル 第3版

柴田 実, 加藤直也 編

●B6変型 頁308 2017年6月

定価：本体4,500円＋税

[ISBN978-4-260-03042-7]医学書院刊

近年、肝疾患診療の変貌が著しい。一昔前であれば、肝疾患は自然に治るか、治らずに進行するものと考えられていた。従来わが国でよく使われていた肝疾患治療薬は、その有効性に関するエビデンスが乏しく、世界的にはまったく評価されていなかった。一時期は画期的であったインターフェロンなどの抗ウイルス薬も限界は明らかであった。しかし現在は状況が一変した。特にインパクトが大きいのがウイルス肝炎の治療であり、現在では治療が望める疾患の筆頭となっている。

このたび医学書院より『肝疾患レジデントマニュアル 第3版』が上梓された。肝疾患診療必携の書として定評のあった本書は、ようやくここにきて9年の歳月を経て新版となった。進歩の著しかったこの数年間を考えると、改訂は遅きに失したという批判もあろうが、評者はそうは思わない。書籍は医学雑誌と異なり、最新の知見を盛り込めばよいというものではない。華々しく登場した検査法や治療法が、5年程度で廃れてしまうことが少なくない。せっかく購入した書籍がすぐに役立たなくなるのは悲しい。新しい診療行為が学術報告され、十分に臨床使用され、実績と定評が確立してから成書とすべきであろう。C型肝炎に対する直接型抗ウイルス薬が出そろい、その有効性と有害性に関する評価が定着した現在が、改訂版を世に出す素敵なタイミングであったと考える。ついでに言えば、PBC

の病名変更も間に合ったし、IgG4関連肝胆道疾患やNAFLDの新しい知見も含むことができた。いささか「あと出しじゃんけん」で勝っている感もあるが、その恩恵を受けるのは読者である。

初版から筆頭編集者である柴田実氏は、評者が最も信頼する肝臓専門医である。医育施設や基幹病院に在籍時代から肝疾患の臨床研究と診療に没頭され、診療に多忙な実地医家となられてからも研究や執筆活動を継続している姿勢には敬服する。一般に医学論文を吟味する際、高名な著者による論文の評価をついつい高めてしまうことをAuthor Biasといい、EBMでは禁じ手である。本書は柴田実氏と素晴らしい仲間たちの作品ということで、どうしてもこのバイアスを排除できないが、これは適切な方向に作用していると考えたい。

本書は院内外どこへでも持ち運べるコンパクトサイズで、まさに必携の書といえる。旧版よりもスリムになったが、巻末に肝疾患診療に関連したウェブサイトのリストが掲載されており、随時必要な最新情報を入手するのに役立つ内容に不足はない。変貌を遂げた肝疾患診療の実態を詳細に把握しているのは、おそらく肝臓専門医だけであろう。それ以外の消化器内科医や他の内科医、他科の医師がそれを十分理解しているとは思えない。したがって研修医のみならず、肝疾患診療に携わる全ての医師に本書を推薦したい。